

”待ったなし”の認知症対策
地域ぐるみで考えるための場づくりを

かまくら認知症ケア研究会 © 神奈川県鎌倉市

「増え続ける認知症高齢者の生活を支えたい」。そんな思いに突き動かされた地域のケアスタッフが作った、かまくら認知症ケア研究会。予算がないぶんは、会員のカンパや市の協力で補い、事例検討会などで交流を深めています。(編集部)

お好み焼き屋が出発点

2007年秋、鎌倉市内のとある老舗お好み焼き屋の個室を借りて、認知症ケア関係者の集いと称した飲み会が行われました。

会の冒頭、幹事からこんな挨拶が…。「認知症ケアにはチームワークが何より大切といわれています。お集まりの皆さんもお好み焼きを作るという共同作業を通じて、ぜひ交流を深めてまいりましょう…」その飲み会が後の「かまくら認知症ケア研究会」につながる、貴重な一歩になったのです。

早くも飲み会の翌々日には、市高齢者福祉課の内海春信係長を交えて協議し、「かまくら認知症ケア研

究会」立ち上げの方向で意見が一致しました。認知症対策に頭を悩ませていた市にとってもちょうどいいタイミングだったようです。

その後、月1度のペースで市の福祉センター会議室を借りて意見交換を続けています。認知症ケアの課題を検討し、多職種協働の重要性や、ケア関係者をつなぐネットワークのあり方などについて話し合いをしてきました。

事例検討会は意見を出しやすい雰囲気を作るよう心がけています



仕事の活力が得られる場にしたい

鎌倉市の高齢化率は現在26%を超えており、認知症対策は“待ったなし”といった現状にあります。これは決してケア関係者だけの問題ではなく、今や地域全体で考える時期に来ているのではないかとそんな視点に軸足を置いた活動を行っています。



左が市高齢者福祉課介護保険担当係長の内海春信さんです。オブザーバーとして会に参加していただいています

参加する1人ひとりが、職種や立場の違いを超えてケアのあり方を真剣に考えて交流する、介護の苦勞を分かちあえ、明日への活力が得られる場を提供していきたい。そんな思いが活動の原点にあります。

2008年には、本人本位のケアを実践する足がかりの活動として、『センター方式勉強会』を実施しました。センター方式は、認知症介護研究・研修東京センターで開発された認知症の人のためのアセスメント法です。

● プロフィール 『かまくら認知症ケア研究会』

所在地：神奈川県鎌倉市
 入会資格：会員登録制で、誰でも参加できる
 入会金、会費：なし
 問い合わせ：鎌倉市御成町18番10号 鎌倉市役所 高齢者福祉課 内海
 TEL 0467-61-3950 (直通)



センター方式の研修にはのべ211人の人たちが参加し、大盛況でした。

勉強会は4月から7月までの4回、毎月第3水曜日の夜に鎌倉市福祉センターの会議室を借りて行い、参加者には実際の事例を持ち寄ってもらいました。グループワークによる演習を行い、そのなかで日常のケアの困難な状況を話し合ったり、ケアのヒントやアイデアの気づきを得るなど、実り多いものとなりました。勉強会には、延べ211名が参加し、1

お菓子はカンパで

勉強会や検討会に参加する人の多くは仕事を終えた後に駆けつけるので、疲労を蓄積しない工夫も必要だと考えています。そのひとつが、コーヒーやちょっとしたお菓子などを置いた休憩処の設置です。会の合間の休憩の時間などに、ひと息入れ

地域でネットワークを広げたい

実は私たちの研究会には事務局も予算もありません。研修会案内の郵送などは行政の協力をいただいています。今後もさまざまな機関、地域

回の平均参加者数は52.7名でした。

8月には東京センターの永田久美子さんを招いた市主催の研修会、「地域でその人らしく暮らし続けるために」に企画段階から協力したほか、研究会の幹事が講師となって「認知症の基礎的理解」を深める研修会も実施しました。「地域ケアのネットワークの在り方」をテーマに、センター方式を活用した困難ケース改善活動の報告会と交流会も行っています。

また、多職種協働をより有効に実践するために、研修会の参加者がグループワークを通じて支援の在り方やケアの工夫を考え提案する、参加

者提案型の「事例検討会」も実施しました。これは困難な状況にあるご本人やご家族と介護事業者等を、参加者みんなが知恵を出し合い、支えあえる仕組みづくりを目指したものです。

自由に発言できるアットホームな雰囲気をつくるよう心がけているので、参加者からは「大変でしょうが頑張ってください」という励ましの声が出たり、事例の提出者から「みなさんありがとう」という感謝の言葉が語られるなど、検討会の終る頃には、会場全体が温かな一体感で包まれていました。



お菓子や飲み物は会員のみさんのカンパで賄っています

カンパによってまかなわれており、小瓶にお金を入れていただいています。

で雑談したり、コーヒーを飲みながら情報交換をしたり、ネットワーキングができる場として有効に活用してもらっています。

休憩処のテーブルには小さな小瓶が置かれています。コーヒーやお菓子の代金は参加者の気持ち程度の

の活動と連携してネットワークの輪を広げていきたいものです。それぞれの地道な活動が手をつなぐことで、現場で困難に直面している認知

症の人とその家族やケア関係者を支えていきたいと考えています。

執筆：代表 稲田秀樹 (社会福祉法人鎌倉静養館ケアセンターりんどう管理者)